

聞き方が問われる

2022年2月9日

理事長 海野 道郎

聖書:マルコによる福音書 4章1節～9節

¹ イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。おびただしい群衆が、そばに集まって来た。そこで、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられたが、群衆は皆、湖畔にいた。² イエスはたとえでいろいろと教えられ、その中で次のように言われた。³ 「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。⁴ 蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。⁵ ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。⁶ しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。⁷ ほかの種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆いふさいだので、実を結ばなかった。⁸ また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった。」⁹ そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。

コロナ・ウィルスが、仙台都市圏だけでなく世界中を席卷しています。その中で開かれる本日の礼拝は、参列者を制限せざるをえなかったとのこと。実際、いま私の目の前にいる方は多いとは言えません。しかもその多くは、聖書の知識を私よりも格段に豊かにお持ちの方々です。しかし、本日の私の話は主として、この場においてにならない教職員の方々に向けられます。すなわち、宮城学院に就職するに際して「キリスト教主義教育に理解がある」と誓約したものの、就職後は必ずしも、自らがキリスト教主義教育機関の担い手であることを意識せずに過ごしているであろう大多数の教職員の方々、そのような人々が、これからのメッセージの主な対象です。

聖書の中には有名な話がたくさんありますが、今日取り上げる「種蒔きの話」も、その一つです。共観福音書と言われるマタイ、マルコ、ルカ、3つの福音書すべてに納められているという事実は、先行して作られたマルコ福音書の記事を見たマタイやルカが、「このエピソードは自分たちの福音書に収めるに値する」と判断したことを示しています。3つの福音書の記事には、状況設定などに若干の違いがありますが、コアの部分は同じですので、今日はマルコの記事に沿って考えていきたいと思います。

先ほど読んだマルコの4章1節から9節には「『種を蒔く人』のたとえ」というタイトルが付いています。種を蒔く人が種を蒔くと、その種が、道端や、石ころだらけで土の少ない所や、茨の茂みの中や、良い土地など、様々な土地に落ちます。そして、落ちた場所によって種の運命は大きく異なる、というのです。聖書によれば、(1)道端に落

ちた種は鳥に食べられてしまい、(2)土の薄い岩地に落ちた種は、芽を出すことはできても根を張れないので枯れてしまい、(3)茨の中に落ちた種は、伸びた茨に阻まれて十分な光を浴びることができないために実を結ぶことができず、(4)良い土地に落ちた種は、伸びて大きくなり、たくさんの実を結ぶ、というのです。

では、この話は、何を表現しているのでしょうか。何を例えているのでしょうか。その答えは、イエス自身が、聖書の少し先で述べています。同じ4章の13節以下、『種を蒔く人』のたとえの説明」という小見出しが付いている箇所です。(1)道端に落ちた種が鳥に食べられてしまう、というのは、神のみ言葉を聞いた途端にサタンが来て、その言葉を取り去ってしまう、というのです。現代風に言うと、聖書の言葉を聞いても、その言葉について深く考えることをせず、その時点で自らが持っている知識や信念によって否定し去ってしまう、というのです。(2)土の薄い岩地に落ちた種については、み言葉を聞くとすぐに受け入れるが、受け入れたがゆえの艱難に遭遇すると、いったんは受け入れた言葉や信念を放棄してしまう、というのです。何らかの切っ掛けで教会に縁ができた人が、いつときは熱心に教会に通うが長続きしない、という例は、私の近辺でも時折見かける現象です。日本社会の伝統の中でキリスト者として生きることには、それなりの困難が伴います。伝統や文化との軋轢が避けがたく生じます。それは、個人的レベルに限られるものではありません。私たちが働く宮城学院においても、太平洋戦争のさなかには、時の権力の圧力の下でキリスト教教育を完遂できない時代があった、という事実を忘れてはなりません。(3)茨の中に落ちた種の例えは、もっと微妙で、ある意味で深刻です。キリスト者として生きようとする人でも、富や権力など、この世の価値から完全に解放されるのは困難です。そのため、イエスに倣って生きているつもりが、いつの間にか、イエスの指し示す道から逸れていく恐れがあります。当人は真面目なキリスト者として生きているつもりだと思っているだけに厄介です。(4)そのような困難を免れるのは、良い土地に落ちた種です。すなわち、み言葉を聞いて素直に受け入れる人は、成長し、大きな成果を挙げる、というのです。

以上、聖書のテキストに沿って考えてきましたが、では、われわれは、ここから、何を読み取ったら良いのでしょうか。

まず注目すべきなのは、今日の聖書テキストでは(a)蒔かれる種の種類や性質については議論していない、ということです。実際に我々が接するキリスト教に関する話の中には、核心をついたものもあれば、それほどでないものもあるでしょう。中には、誤ったメッセージさえ存在するでしょう。しかし、それは、今日のエピソードの論点ではありません。(b)第二に着目すべき点は、神がみ言葉という種を蒔くときに、「どのような土地を選んで蒔けば、み言葉が受け入れられるだろうか」という問いを発しなかった、ということです。つまり、キリスト教のメッセージは、限られた人に対してだけ蒔かれているのではなく、すべての人に蒔かれているのです。残る論点は(c)蒔かれる場所です。つまり、私たち一人一人の人間、一人一人の精神です。私たちは、日々の社会生活を営む中で、さまざまな事実や価値に接します。そのような状況の中で、私たちが

自らの精神を、信念体系を、どのように構築し続けるか、という問題です。それが問われているのです。

私は、いましがた、「自らの精神を、信念体系を、どのように構築し続けるか」と述べました。「構築し続ける」というのが重要なポイントです。個々人の信念体系は、「青年時代に確立して生涯保持し続ける」というものではなく、生涯に渡って構築し続けるダイナミックなものなのです。そのダイナミック・プロセスをどのように進めるか、それが問題となります。

私たちは、生まれてから今日に至るまでに、さまざまな事象や価値に遭遇する体験を通して、各自の信念体系を形成してきました。それは、一方で、個々人に固有のものですが、他方で、それまでに接した事象や価値の共通性を通して、地域や社会階層、民族、年齢階層、思想などによる近似性が生まれます。自分自身の考え、信念体系は、自分独自のものであると同時に、無意識のうちに制約を受けているのです。そして私たちは、そのような「自らの」考えを保持しようとしています。それが、情報処理のコストを最小化することになるからです。

情報処理コストを最小化しようと努めることは、ある程度は仕方のないことです。私たちは、非常に多くの情報を伴う複雑な状況の下で、数多くの意思決定をしつつ日々を過ごしていますから、そのすべてについて、何の予断もなしに意思決定をすることなどできません。私たちの情報処理能力がパンクしてしまうからです。私たちは、多くの問題については、状況をパターン化することによって情報処理コストを低下させると同時に、肝心な問題については、十分にコストをかけた意思決定を行うべきでしょう。

情報処理コストを最小化する戦略は、現時点における自己の信念や価値を絶対化し、それ以外のものを受け付けずに拒絶することです。それは偏見が持つ基本的特性です。偏見研究が盛んなアメリカ合衆国においては、白人が抱く黒人やアジア系に対する偏見、キリスト教徒が抱くユダヤ人に対する偏見などがしばしば言及されます。日本においても、「いわゆる日本人」が、部落民や在日コリアンに対して偏見を抱いていることが知られています。実際には、黒人や部落民など、偏見の対象となる社会的カテゴリーの人々の間にも、いろいろな人が存在します。白人や「いわゆる日本人」の間にさまざまな人がいるのと同様です。

偏見の一つの側面は、過度の一般化です。「黒人は急情だ」、「ユダヤ人はずるがしこい」などのステレオタイプは、その例です。「東北人は粘り強い」などもその一つと言えるでしょう。東北人には粘り強い人が多いかもしれませんが、そうでない人もいるに違いありません。

しかし、偏見というメカニズムは、特定のカテゴリーに対する態度だけに生じるのではなく、私たちの日々の意思決定とともに生じているのです。

私たちが偏見から解放されるためには、どのような態度が必要なのでしょう。前提となるのは、現時点における自らの信念体系を正しく評価することです。自らが形

成してきた信念体系に誇りを持つこと自体は、悪いことではありません。しかし、それと同時に、「現時点における自らの信念体系は、自分自身が歩んできた一定の条件のもとに形成されたものだ」という厳然たる事実を、謙虚に認めることが必要です。個人がある時点で抱く信念体系は、いかなる人のものであれ、条件づけられた限界を持つものなのです。それゆえに、可塑性を持っているのです。この前提のうえに、開放性、一貫性の追求、曖昧さへの耐性、普遍性の追求という4つの性質を有することが、偏見から解放されるために必要だと考えられています。この条件は、偏見を保持しようとする力に、逆向きの力を加えようというものでもあります。

第一の性質は「開放性」です。一見したところ取るに足りないものや受け入れがたいものでも、頭からはねつけたり無視するのではなく、一たびは検討の対象とする、という性質です。とはいえ、認知能力が有限である人間にとって、文字通りすべての対象について検討の対象とすることは不可能です。そこで実際には、ある問題が検討の対象に値するか否かを的確に判断することが重要になります。何を検討の対象とすべきかの判断は価値判断ですが、生き様を左右する重要な問題に対して開かれていることが大切です。これは大きな認知的・精神的負担を伴うことですが、この基本的なスタンスなしには、現在の(限界をもたざるを得ない)信念体系から脱皮することができません。

第二の性質は、「一貫性」です。自らの信念体系の中に異質なものを、互いに矛盾するものが併存しているなら、それは自律的人間の信念体系とは言えません。しばしば引合いに出される「生まれた時にはお宮参りをし、キリスト教式で結婚式を挙げ、佛教式の葬儀を行う」というのは、日本人の寛容さ、美徳の現れだと多くの場合には肯定的に評価されますが、自らの信念体系の中に、その基底を占めるべき宗教という基本的価値が定位していないことを現わしているに過ぎません。知的に生きる人間は、自らが行うさまざまな行為の根底を流れる価値の間に矛盾がないかどうかに関心を感じなければなりません。一見したところ寛容な「何でもあり」の精神は、結果的に、マイノリティに対する偏見を温存することにも繋がります。

偏見から脱出するために求められる第三の性質は、「曖昧さへの耐性」です。矛盾した価値に接したときのもっとも安直な対応は、心を閉ざし新しい価値を頭から否定したり無視したりすることです。「開放性の欠如」ですね。また、開放性を持ち新しい価値が入り込んだとしても、「一貫性」がなければ、相互に矛盾した複数の価値を併存させた状態で、それなりの均衡状態に達します。しかし、一貫性を求める人間は、その矛盾を解決しようとします。ただ、それは一般に、簡単な課題ではありません。解決にはしばしば、多くの時間と労力が必要となります。その間、その人の精神は緊張状態にあります。矛盾を孕んだ新旧いずれかの価値にコミットすれば緊張状態からは解放されますが、それは逃避に過ぎません。課題解決に至るまでその緊張状態に耐えることが求められるのです。

最後に求められる第四の性質は「普遍性の追求」です。自らの信念体系が内的

に無矛盾で一貫性を持つものになったとしても、それが他者の信念体系、社会に存在する価値と無縁であってはなりません。他者が有する価値と擦り合わせ、両者の間に共有する価値を構築しよう、とする姿勢が求められます。ただし、これは、微妙な概念です。社会に現に存在する価値体系を普遍性の絶対的基準とするなら、それは時に危険なことになります。それは、現に存在する社会的価値への同調に過ぎません。第二次世界大戦中にクエーカーなどが示した良心的兵役拒否は、社会制度である徴兵制を超越したものでした。社会に現存する価値体系を越えた「普遍性」を基準とすること、それは困難ではありますが、私たちがめざすべきものでしょう。

いささか回り道をしましたが、ここで、初めの問題にもどりましょう。宮城学院における「キリスト教主義教育に理解がある」と誓約した教職員ひとりひとは、キリスト教に対してどのように相対したらよいのでしょうか。私たちは、日々の生活の中で、直接に見聞するだけでなく、マスコミやミニコミを通して、さらには自らが探求する中で接する情報を通して、意図するしないに関わらず、キリスト教に関係するいろいろな情報に接することになります。その時、私たちは、どのように対処するのでしょうか。

偏見について述べたところで私は、異質な思想に触れた時取る態度の一つは、それを無視することだと述べました。意識的無視もありますし、無意識的無視もあるでしょう。しかし、私たちは、「キリスト教主義教育に理解がある」と誓約し、現にキリスト教主義を標榜する教育組織の中で働いている人間です。そのような立場の人間としては、キリスト教に関する情報を無視するのはフェアではありません。接した情報の中を覗いてみるのが、筋というものではないでしょうか。

教職員の中には、自分は確かに就職の際に「キリスト教主義教育に理解がある」と誓約したが、あれは就職活動を成功させるための方便であって、本心ではない、という人がいるかもしれません。もしそうであるなら、それは、宮城学院にとってだけでなく当人にとっても、大変に残念なことです。キリスト教に限らず、宗教は信念体系の根幹をなすものですので、それを就職の方便にすることは、教育機関である宮城学院の教職員としてだけでなく、思想をもった個人としてあるべき姿とは言えないでしょう。

私は、何も、人間は常に本心をさらけ出すべきだ、本心通りに行動すべきだ、と言っているわけではありません。戦時中に特高の拷問に堪えかねて転向した共産主義者やキリスト者を、当時ほどは思想弾圧が激しくない現代の高みから軽蔑することは、私にはできません。明日の食い扶持にも事欠く人間が物乞いをしたり盗みをしたりするのも理解できます。しかし、宮城学院への就職に際して教職員志願者が直面した状況は、そのような状況ではありません。就職口は宮城学院に限られているわけではないのです。そのような状況を経由して宮城学院で働いている皆さんですから、その職場を大切にしていきたいと思います。そして、その職場が130年以上にわたって大切にしてきたキリスト教に相対して欲しいと思います。

私は、教職員の皆さんに対して、「なるべく早くキリスト教徒になってくれ」と言っているわけではありません。そうではなく、宮城学院の「キリスト教主義教育に理解がある」

と誓約した皆さん一人一人が、自らの誇りをかけて、キリスト教主義教育を遂行する教育機関の一員として、キリスト教と格闘して欲しいと思うのです。皆さんの多くはキリスト教以外のバックグラウンドの中で育った人でしょうし、たまたまクリスチャンホームに育った人も含めた教職員のすべてが、日本社会という非キリスト教的社会環境の中で生きてきました。そのような人間が、何の疑問も躊躇もなくキリスト教に馴染んでキリスト者になることなど、考えにくいことです。「キリスト教主義教育に理解がある」とはどのようなことなのか、その追求を通して、現在の制約された自らの信念体系を吟味する努力を継続していただきたいと思います。

その課題は、もちろん、日頃から私が私自身に課している課題でもあります。

〔祈ります〕

万物の創り主なる私たちの神様。

私たちは今日、あなたの言葉が、あなたと接する機会が、私たちの周りに豊かに与えられていることを知りました。さらに、そのような状況の中で、どのように自らの精神を形成するかが問われていることを確認しました。

どうか、私たちが、自律した人間として、あなたと正面から向き合い、問いを投げかけ、苦闘する力を与えてください。

この小さき祈り、イエスキリストの御名を通して御前に捧げます。

アーメン。